

BS910ch 2012年度番組審議委員会議事録

日時：2012年4月23日15:00～16:00

於：ウェザーニュース赤羽橋オフィス

委員：

今村文彦 東北大学大学院工学研究科附属災害制御研究センター センター長

白石 康次郎 海洋冒険家

杉本 誠司 株式会社ニワゴ代表取締役

戸矢 時義 World Meteorological Organization

中村 伊知哉 慶應義塾大学メディアデザイン研究科 教授（博士）

橋本 安弘 （元）朝日放送株式会社専務取締役

高橋 幸弘 北海道大学 大学院理学院・宇宙理学専攻 教授（博士）
（都合により欠席）



1) ウェザーニュース（番組）全体をどう感じるか



- ・これからのメディアのキーワードは「みんな」である。みんなが作る参加する。子供もおばあちゃんも写真を撮り送ることができる。それが集まってくる先は通信と融合したテレビである。
- ・メディアは今20年に一度の大きな波が来ている。マルチスクリーンで、融合のネットワークで、ソーシャルサービス。それらを一気にドンとやっている。
- ・ネット的である。それは、集合知となる一つひとつが人間の細胞みたいなもので、誰か一人が欠けてもできない、そのプロセスをコンテンツにしていく。その意味で非常にネット的である。
- ・日本は繊細な民族で季節に対する情緒的感性が豊かである。それによりこういう番組が成り立つとも考えられる。
- ・天気予報は朝昼晩と、若い人からおばあちゃんまで見ている。メディアリテラシーとして情報ツールを一緒にどう共有できるか工夫が必要

2) Join&Shareで広がる減災



- ・災害は発生した直後、それぞれが命を守る、また、二次災害を減らすという行為である。例えば地震が起きたあと、次にくる津波や地滑りなど次にくるものに対して情報を出していくのが本質的に重要なことであるが、現在行政が担っているがそれだと一人ひとりのレベルに適切には伝えられない。そこが今の日本の減災が抱える本質的な課題になっている。一般的な情報では減災はできない。
- ・自分は大丈夫じゃないかという思い込みがあるが、過去の災害や当時の自分たちの行動をもう一度見ることはできる。毎日減災は難しいが、節目ごとにみんなで一緒に考えるということが大切。

・大切なのは問題を直視することなのに、3・11では日本政府は問題を直視していない。情報に対し、パニックするのはなど、余計なことを考えてしまっている。ウェザーニューズは大切な情報で正確だと自分たちが思えばそれを出していけばよい。あとは利用者がたくさんある情報の中から自分で判断すればよい。あとは本人次第だ。



・減災に限らないことだが、基本的にサポーターやユーザーの方々が一番最初に勘違いしていけないのは、全ては与えてもらうという関係ではなく、自分たちが情報発信して、ある意味ウェザーニューズというのはプラットフォームで、その情報をどんどん集約して共有していく場であることを認識したほうがいい。そうすると、サポーターやユーザーの方には、完全に情報が多すぎる情報過多の状態になるが、それは極めて自然な状態で、ネットを使う以上は、その情報が自分にとって過剰な中で、いろんな人の知見であったり、あるいは参考情報だったり、あるいは、ウェザーニューズからの専門家としてのコメントであったりする。それを、自分の中で信じられる情報を整理して、自分に活かしていく。そういう自分に活かせる情報を提供できる場があるということが結果的に減災にもつながる。そのスタンスをウェザーニューズはしっかり貫いていくことが良いのではないのか。そのスタンスでいいのか、っていうところを我々に問われていると思う、その意味だとむしろそれが正しい形と思っている。

3) 放送事故について



・放送であってはならない事故ですが、ライブ放送ではどうしてもこういうものに直面する。このときに、今我々トラブルの中に居るんだということを視聴者の皆さんに素直に伝える努力が必要と思う。映像なり、音声なりが今こういうトラブルだということ。特に天災の状況になっているときにそれは必要。意識的に音をきっているのかとかいろいろ懐疑心が見ている方に起きてしまうことがある。それを避けるためにも今起きていることを表現することが大事だと思う。

・地上波でもセシウム君のようなことは起きる。事故っていうのはこれからネットと融合していくと、視聴者サポーターの方がリアルタイムにもっとたくさん入って来たらもっと起きるだろう、だからこれからもっと起きるといこともひとつ覚悟しなきゃいけないんだと思う。それは、局側も思っていなければならないし、同時に見ている人たちが、そういうことが起きたときにどこまで大目に見るの？っていうこれもひとつの情報リテラシーじゃないか。そのあたりのラインが従来は非常に高かった。これから低くなるというのではなく、多様化していくと思う。



・これから番組コンテンツは放送であってもライブが多くなると思う。生となるとリスクが高まってくる。基本的に音が出ないということはあってはいけないのかもしれないが、最終的に一番目的とするところ、正確な情報を、事実関係をきつと伝えるということが全う出来るのかどうか、という所。仮に音が出なくても文字で伝えるとか、あるいは画面がでなくても音で伝えるとかということを担保しようとするマインドや体制を持っていることが重要ではないのか。



4) 笑いについて



・笑ってっていうのは、その人の産まれてから一生のそういうもので笑ってっていうものが作られるわけで、それぞれの地方でも違う、文化でも違う。だから違う異文化の笑いは中々受け入れられない。なので日本人で大阪の浪速の笑いが判る人というのは、やはり大阪の人。笑いの意味を理解するのは非常に難しいこと。だから笑いを番組の構成上使っていくのは難しい手法の一つである。だから大事に研究してもらいたいと思う。

・ずっと沖でヨットで落語を聞いている。名人の圓生のスタジオで撮ったのとライブで撮ったのとあるが、昔の録音は、犬の鳴き声やバスの通るのが聞こえる。やっぱり、寄席でやったほうが断然面白い。このライブ感というのは、みんなと共有感が必要ですから、笑いというのは、意外といいです。



・見ている側からすると、最近テレビなんかでそうだが無理矢理笑いを入れている感があって、ちょっと飽きてる感があるから、多分いやなんですよ。それはわかるんですよ。僕はそれを違う方から見ていて、この笑いは僕にとってはあったほうがいい。特にスタッフの人に笑ってもらうというのは重要で、多分ここにこないとわからないが、オーディエンスの皆さんの前でしゃべるっていうのはすごいプレッシャーがある。そのときに、スタッフの方が明らかに無理矢理ってわかるんですけど、ただそこで笑ってくれると少しリラックスするんです。そうすると本来自分じゃしゃべりたいなと思っていることとか、しゃべらなければいけないことが結構引き出されてくる。またこの場が和んだりすることによって番組そのもののコンテンツそのものの質が上がっていくという効果もあるので、多分笑い声そのものはちょっと耳障りな部分があるかもしれないが、よりよいコンテンツを作る為にスタジオ側が演出として取り入れている、笑いも一役買っているという理解を視聴者の方にもしていただけるといいんじゃないか。

5) 最後に一言コメント



ウェザーニュースはパンク。
これからもパンクでいてもらいたい。
規制ともけんかして、日本の感性活か
してがんがん突き進んでもらいたい。



万人に共通していないことが日常生活に多いの
で、いろんな生活を送っている人のために天気っ
ていう共通項をちゃんと共有するためにもどんど
ん関係ないようなことも広げていっていい。



いかに自分ごとの情報にしていくのか。出し方も
受け取り方もあるが、その工夫をして価値ある情
報にしていきたい



まだ振り返るには早い！、世界的にも稀な
チャレンジなのだから、いろんなことに取り
組んでまだまだ前進です。



天気が楽しい、知ることが楽しい、そして知
ることで生活が豊かになって、笑える、それで
自分たちの生活がハッピーになる。そういう
番組を目指して欲しい。



モスクワで熱波、ハリケーンがどこに、今ど
この火山が噴火している、こういうグローバ
ルな紹介もしてくれると。